

「主婦」に見る「物質文化」への傾き  
Shen Congwen's Fascination with Material Culture:  
Another Look at the Short Story, Housewife (1936)

福 家 道 信 (Michinobu Fuke)\*

ABSTRACT: Shen Congwen (1902-1988) left behind an outstanding legacy as a material culture researcher. His four books on the subject, "The Designs of Chinese Silk" (1957), "Bronze Mirrors of the Tang and Song Dynasties" (1958), and "Dragon and Phoenix Art" (1960), and "A Study of Ancient Chinese Costumes" (1981), have in common his strong interest in the field, an interest that began long before he started his literary career. Furthermore, even in his fiction, readers can often see signs of this fascination. In this thesis, we examine Shen's short story, "Housewife," in which the male protagonist displays an obsession with ceramics, and analyze the reasons for this obsession and the piece's literary style. Previous research by Wu Lichang analyzes this story from a Freudian perspective. However, we will consider it from a broader viewpoint and examine how Shen Congwen's deepening fixation with material culture became progressively apparent in his literary works.

KEYWORDS: 沈從文, 文学, 物質文化史, Shen Congwen, literature material culture

## 1. はじめに

沈從文(1902-1988)の生涯を振り返ると、前半の文学創作の時期に加えて、後半生の「物質文化」(考古学・文化史)研究者としての時期が続き、1950年代における『中国絲綢図案』(1957)、『唐宋銅鏡』(1958)、さらに1960年代の『龍鳳芸術』(1960)より『中国古代服飾研究』(1981)に至る後半生の業績も高く評価されている。

沈從文の文化史研究に対する興味は、1949年の転業の時、俄かに始まったものではない。この問題については、4つの時期に注目して確認することが可能である。第1は、彼が1923年、湖南省西部、保靖において、彼が軍閥指導者陳渠珍の秘書をしていた時であり、『従文自伝』『学歴的地方』(1934)が資料となる。沈從文が北京で文学創作を開始するのは1924年であるから、文化史に対する興味は文学創作

\* Professor of Chinese Studies at the Faculty of International Studies, Kindai University. E-mail: fujiadaoxin28@intl.kindai.ac.jp

に対する興味よりも早い時期に認められる。第2は、1933年、沈從文が張兆和と結婚した当時であり、その時に彼はすでに陶磁器類の蒐集に熱中していたことが自身の短編小説「主婦」（1937）の内容などから確認できる。第3は、日中戦争勃発後、沈從文は戦火を逃れ雲南に赴き西南連合大学で教鞭をとるが、疎開の旅程において、また雲南での滞在期間中に日常の陶器、漆器類に古代以来の遺制を認め、大量の実物を収集する。1949年精神失調をきたした際の「關於西南中国的漆器及其他」（1949）の後半部分に書かれている内容が疎開中の彼の文化史に対する博識の度合いを物語る。第4は1950年代以降、ほかでもなく専門の研究者となつてからの時期である。

注目すべきは、1940年代の後半において、彼は北京大学博物館の設置に際して自身の収蔵品を寄付し、精神失調の療養中にも陶器に関する著述を行うなど、すでに専門的な知識を蓄積していたことである。このことからすれば、文学創作を行っていた期間中に彼の内部において物質文化への興味が深化していたことが想定される。

それでは、「物質文化」に対する興味と文学創作に対する興味は、沈從文の内部にあって、どのような関係性をもって発展していたのであろうか。

この問題を考えることは、沈從文の文学創作の特性をより明確にすることにつながるであろうし、また、彼の物質文化研究における独自性を浮かび上がらせる契機になると考えられる。

50年代以降の彼の著述に顕著に表れる基本的性格が、織布および図案紋様に対する興味であることからすれば、織布と図案紋様に関する興味が文学創作の着想に結び付いていたと想定するのが自然ではないかと筆者は考える。また、沈從文の出生地湖南省鳳凰県の立地と文化的特性はこの想定を裏付ける。上述の湖南省保靖時代に先立ち、彼が苗族、土家族、漢族など民族的混淆状態のなかで生まれ育った点は重要である。

小論では以上のような想定のもとに、沈從文の物質文化に対する興味が顕著に表れる上述第2の時期の資料、小説「主婦」を取り上げ、作品内容において沈從文がどう語られているか、また表現手法としてどのような技法が使われているか、この2点を明らかにしたい。このことにより、創作への志向と物質文化への志向がこの当時ともに沈從文によって意識的に思索され、後々のそれぞれの発展を考えた場合、原則的な姿勢が形成されたことが確認されよう。

## 2. 「主婦」の内容と表現——その1 叙法

結婚3周年を記念して、1936年に沈從文は「主婦」と題する短編小説を書いている。

る<sup>1</sup>。ここに描かれた碧碧という 26 歳の妻と第 3 人称で彼と記される人物は、結婚式当日のありさまや、二人の人格、結婚前後の状況などからして、確かに沈從文と妻の張兆和（1910－2003）の生活を原型としていてと考えてよいであろう。

叙法として、沈從文はこの作品で張兆和を想起させる女性主人公を碧碧とし、男性主人公を終始一貫して「他」つまり彼と書いている。このことはこの作品の基本的性格を考えるうえで留意してよいかもしれない。

年譜的事項と創作歴を振り返った場合、1929 年、中国公学で沈從文が張兆和と知り合ってから以来、沈從文の作品には、短編小説「三三」（1931）、短編小説「三個女性」（1933）、中編小説「辺城」（1934）など、間接的にはあるが、張兆和の存在が織り込まれたと考えられる人物が登場する。

いっぽう、沈從文の没後発表された書簡集『湘行書簡』（1992）の内容は、沈從文が 1934 年当時、直接、妻の張兆和宛てに書いた手紙が主たる収録内容となっている。この場合、当然のことながら、沈從文は張兆和に対して、1 人称で語りかけ、相手を 2 人称、時に張家の 3 番目の娘との意味で「三三」の名前で呼ぶ。いっぽう、書簡集冒頭に配された張兆和の手紙では沈從文のことを 2 人称、または沈家の 2 番目の男子の意味で「二哥」と呼ぶ。

しかし、この書簡集のなかの部分的な書信は、後に、それぞれ独立したかたちで散文作品の資料となり『湘行散記』（1936）にまとめられると、もとの書簡に存在した 2 人称がすべて消失し、1 人称による叙述のみとなる。もとの書簡に満たされていた 1 人称から 2 人称に向けられた、当事者以外の読み手には時にいささか過剰と思われる愛情表現は姿を消し、当時の湖南西部の切実で緊迫した現実感が行間から強く伝わる作品となる。

このような創作の推移のなかで「主婦」の叙法を考えると、作品中に実名を持ち込むことなどは一切なく、女性主人公を碧碧とし、男性主人公を 3 人称で語り通していることにはそれなりの判断があったと考えられる。少なくとも、ここでは 1 人称と 2 人称の関係性は払拭され、客観化への志向が、他作品の事例と比べて顕著となる。結果的に描出されるのは二人の登場人物それぞれの人格であり、人格の出会い、接近、結合、その後の生活を通して、互いに知れば知るほど容易には変えがたい互いの個性となる。

だが、それは書き手の深い思考と洞察によるものであろう。或いは、作品の背後で当事者間において交わされた相互認識の結論が反映されているとみるべきかもしれない。2 人の結合が不幸なのかというと、そう述べているわけではなく、結婚 3 周年の記念にふさわしく、この作品では若い主婦への賛美が、沈從文の文学技法の粹

<sup>1</sup> 『月報』第 1 巻第 3 期、1937、『沈從文全集 8』p.351-364。吳立昌『『人性的治療者』・沈從文伝』上海文芸出版社 1993、p.162-163 参考)

を凝らしたかたちで書かれている。女性主人公の碧碧という重ね型の命名法は、言うまでもなく「辺城」の翠翠、「蕭蕭」(1930)の蕭蕭、「三三」の三三などと同じく、作者が愛情を注いだ女性主人公たちに対するのと同様のやり方である。

### 3. 「主婦」の内容と表現——その2 構成

この小説の内容は、2人の男女の出会い、結婚、3年間の生活について、およそ次のような構成場面から成り立っている。

- (1) 結婚記念日、朝の碧碧の外貌、意識、幻影、記憶
- (2) 3年前の結婚式の日
- (3) 同じ日の夜
- (4) その後の二人の生活、碧碧の妊娠、出産、子供
- (5) 過去における二人の出会い、結婚に至る経過、美について
- (6) 結婚後、顕著になった彼の個性と碧碧の驚き
- (7) 彼の自己認識、骨董趣味の意味
- (8) 二人の微妙な関係
- (9) 結婚記念日の朝の彼
- (10) 庭に出た彼の意識、情緒の飛翔
- (11) 部屋にいる碧碧の意識
- (12) 部屋に帰った彼と碧碧

まず結婚記念日についていえば、沈從文と張兆和の実際の結婚式は1933年9月9日であったが、この作品では年は記されず、日付は8月初5日と記されている。

小説冒頭で早朝の寝室内の若い女性が描かれ、彼女、つまり碧碧は隣のベッドに彼がいないことに気付き、外の天候を想像しながら目を閉じると「一輪のまばゆい金色の向日葵が目の辺りで揺れ続け、濃い紫の花芯とともに変動してつかみようもない」ことに気付く。

彼女は過去の生活をたどろうとするが、それもつかみようのない幻影に似て、絶え間なく目の辺りでたゆまい変化を続けている。本当のこととは何なのか、いちばん信じられるものとは何なのか。はっきり言えない。でも楽しい。そういえば、今日は奇妙奇天烈な日だったのだ。彼女はにっこりとした<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> 『沈從文全集 8』p.351・352

向日葵の形象を作中に使うことは、沈從文が創作を開始した 1924 年の散文『狂人書簡』にも散文の題名として「頭を垂れた向日葵へ」（給低着頭の葵）の比喩的用法で見える。やがて、向日葵のイメージは、「蕭蕭」（1930）、「辺城」（1934）において、この小説のように、主人公に早朝、寢覚めに訪れる幻影のイメージとなる。「蕭蕭」では主人公はそれを見て楽しむだけだが、「辺城」では、翠翠は向日葵の幻影によく似た何かを眺めながら、街に出た祖父の行動を連想する。この小説では向日葵のイメージは、いっそう意識的にクローズアップされて描かれている。引用で見るとおり、それは不思議な現象として人物の視覚に現れ、動態を保ちながら、叙述の流れにおいて直ちに過去の生活の記憶と並列され、意識内の記憶の世界を展開する作中要素として使用されている。この用法は「雪晴」（1946）ではさらに発展して向日葵の幻影は回転し、色彩がやがて変化し、工芸美術品的なイメージに変わる。以上の用例について筆者は「雪晴」の分析を試みた際、沈從文の文学の夢想の豊かさとの関連でその重要性を指摘したことがある<sup>3</sup>。

この小説で興味深いのは、向日葵の幻影を見ることが、美に関する記述とあたかも呼応するかのように、碧碧が彼の求婚について応じた場面に出てくることである。

美とは固定せず境界のない名詞であって、およそ一人の人間の情緒に驚きと快さを刺激によりもたらすものであればそれは美なのだ。彼女は聡明で慎み深く、情義に厚く貞潔で、だれだって彼女に引き付けられるし興味をもってしまう。彼女の温和なまなざしは彼の野心を飼い慣らし、雑念を取り除く。彼は数多くの女性と知り合ったけれども、彼を征服し、統一できる人物として、彼女以外、そのような魔力と能力の持ち主はありえない<sup>4</sup>。

彼の言う美の定義、つまり「美とは固定せず境界のない名詞であって、およそ一人の人間の情緒に驚きと快さを刺激によりもたらすもの」は碧碧の有するものであるし、またこのような美を、不思議な現象として描き出したものが、向日葵の幻影ではないだろうか。

なお、沈從文の後半生の「物質文化」研究を振り返ると、このイメージは彼の円形の図柄紋様への興味につながるものではないかと筆者は想像するが、この点に関しては稿を改めて詳述したい。

さて、「主婦」の内容は、上記（2）より（8）までが、このような叙法により導かれた過去の出来事であり、それは構成上、寝室内のベッドにいる碧碧の脳裏で生起している一連の記憶ということになり、記憶内容は、その中に彼の主張や思考が含まれてはいるものの、基本的に彼女の視点から眺められたものである。

<sup>3</sup> 福家道信「音を手がかりとして——『雪晴』の場合——」近畿大学語学教育部紀要、4-2、2004)

<sup>4</sup> 『沈從文全集 8』p.358

いっばう、上記（９）（１０）は繰り返すようだが、その日、目が覚めて以降の彼自身の意識を述べたものであり、（９）は寝室内での彼の思考、（１０）は屋外に出てからの思考である。

このように、一人、屋内でいる碧碧の意識から着手された一連の過去の出来事の叙述と、それに先立って目が覚め、屋外に出た彼の意識に関する叙述が、作品末尾の（１１）と（１２）において寝室に残っている碧碧と、屋外から帰ってきた彼との合流によって締めくくられる。作品の場面構成と時間はこのような構造により形成されている。

#### ４．「主婦」の内容と表現——その３ 式当日 骨董趣味

碧碧の目から見て、ちょっと風変わりで変な彼は、３年前の結婚式当日も陶磁器などの骨董類に夢中であって、祝い物の骨董が新居に届けられるたびに喜ぶありさまは、ほとんど骨董と結婚したのも同然ではないかと彼女に思わせる。

呼び鈴が響き、表で誰かが話している。「東城の陳公館からのお届け物で、小皿４枚でございます」。新郎はそれを持って新居に駆け込んでくる。「ほら、私の宝物、すごくきれいな小皿４枚。えっ、着替え中。早く見においで。使いの駄賃は１元だね。それにしてもきれいなこと」<sup>５</sup>

碧碧は１年前までの北平へ勉強に行く夢を捨て、今や一人の男との結婚を心底願うようになっている。自分の変化に、偶然の為す技の不思議さをしみじみ感じている彼女の前で彼は４枚の小皿に見とれている。この小皿の種類、釉薬、図柄模様がどのようなものかについて書かれてはいない。しかし、彼は結婚の喜びに浸ると同様、紛れもなく、結婚祝いに知人から送られる陶磁器の美しさに大喜びしている。

続いて王の屋敷から贈り物が届けられ、周の屋敷からも贈り物がとどけられる。片方は陶磁の花瓶で、もう片方は陶俑である。さっき同様、新郎は贈り物を抱いて新居に入ってくる。

「いやはや素晴らしい花瓶と陶俑の美人。碧碧、来てごらん」<sup>６</sup>

式用のシルクのチャイナドレスに着替えた碧碧が小部屋から出てくると、彼は窓の前で花瓶の置き場を考えている。妻の美しさに驚嘆の声をあげ、彼は碧碧に近づく。

<sup>５</sup> 『沈從文全集 ８』 p.352

<sup>６</sup> 『沈從文全集 ８』 p.353

「あら、お願いだから、だめ、触らないで、両手が埃だらけじゃないの。その花瓶、どちら様からのものなの」「周さんからのお祝い」「いったいどういう積りなの。壊れやすい物ばかり集めるのに夢中になって、自分で買ってまだ足りないで、友達からももらおうとするなんて。本当に変」「変なことないよ。これは趣味なのだから。この青釉の花瓶すばらしいだろう」「もう、やめて。手を洗ってちょうだい。趣味のお宝の相手をしていただいいわ。客間へ行かなくては。姉さんがまた大騒ぎしているから」<sup>7</sup>

彼は念願がかなって彼女と結婚の日を迎えた。嬉しさに耐えず美しい新婦のそばに来ると抱きしめずにはいられない。いっぽう、小皿、花瓶、陶五彩の蒐集に夢中になっていて、結婚記念になにがよいか友人に質問されると逐一、骨董類が欲しいことを相手に率直に伝えているのであろう。確かに彼は碧碧のいうように、変な人というべきであろう。

それにしても、彼の要望に従い、普通とは異なる結婚祝いを送り届ける友人が、少なくとも、作中に書かれた件数からすれば四人はいる。このことは、彼の個性と嗜好をそれなりのものとして尊重する知人友人がいることを示している。

作品の舞台是北京であろう。現実の 1933 年に戻るならば、沈從文が北京を最初に訪れた当時より 10 年ほど経過しているものの、辛亥革命から数えればまだ 20 年少々しか経過していない。崩壊した清王朝のもろもろの宮中用品や文化的遺物が、瑠璃廠のみならず随所の市場露店に多く残っていたと想像される。結婚祝いに一定の金額をかけて骨董品を選ぶとすれば、当然、受け取り手を狂喜させる品々が揃う可能性がある。このことからすれば、結婚式当日、新居に新郎新婦用の衣装が届けられ、二人とも衣装の試着に時間を費やすとともに、珍奇な骨董類の贈り物が次々届いて新郎は大喜びし、新婦は前々から気付いていたもののまさかこれほどではとあきれ返る事態が出現するのも不思議ではなく、自然である。

結婚式の賑わいが終わった当日の夜、碧碧は衣類を取り片づけながら彼を観察する。彼は簞笥のうへの羊脂玉の小箱の位置を動かし、コバルト釉薬の皿をそこに置こうと思索中である。黙ったままにいる彼女に対して、彼は 2 度 3 度と立て続けに話しかける。

皿を賛美するかのように、また彼女を賛美するかのように、「私の宝物、本当に素晴らしい。疲れたらう。もう限界かな」

彼女はにっこり笑顔をうかべ、心でこう思っている。「あなたこそ疲れたでしょう。だって、

---

<sup>7</sup> 『沈從文全集 8』 p.353-354

そのお皿の位置を変えるの、これで 5、6 回目じゃないの」

「私の宝物、今日とうとう結婚できたわけだ」

彼女は微笑のままで、こう言おうとしているかのようだ。「あなたは今日、陶磁器と結婚したのも同然だわ。私を宝物と呼ぶかと思えば、そのお皿や壺を宝物と呼んでいるじゃないの」

「誰だって嗜好の一つや二つなくては。嗜好をもつと癖になって、止めようとしてもどうにもならない。銅や玉の收藏は財力がないし、書画は眼識がないけれど、こうした小さな品物は、さほど金がかからず、まったく無意味かというところでもない。だいたい他人の欲しがらないものを求めるのだから、……」

彼女は相変わらず微笑したままだが、その意味はこう言っているかのようだ。「何ですって。他人が欲しがらないものをあなたは求めているというわけなの」

ちょっと待てよ、と彼は考え、言い損なったことをあわてて取り繕いながら言う。「皿や瓶を集めるのは、人が欲しいと思わないものを求めているわけだ。人間については別だよ、誰もが追い求めてもだめだった人を、とうとう自分は手に入れたのだ。私の宝物、この数年、どれほど苦しい思いをさせられたことか、見当もつくまいね」

彼女は相変わらず微笑したままであって、こう言っているかのようだ。「あなたが本当に愛していて、あなたに幸せをもたらすのは、どちらかというところといった壊れやすい品々じゃないの」<sup>8</sup>

引用が長くなったが、沈從文はこの場面で「寶貝」という中国語を、いとしい人物の意味にも、人間以外の宝物という意味にも使用できることから、双関語として使用している。さらに、彼の言葉に対して無言のまま微笑を浮かべている碧碧の心中を、それぞれ彼の想像によって、引用部分のように順次展開してゆく。技法的には、沈從文が『湘行散記』などにおいて見せるのと同種類の、現実から想像への巧みな移行により、人物の内面を描出する方法である。人物の特徴として、彼が話しかけても碧碧は微笑しながら沈黙したままである。

「主婦」は『沈從文全集 8』で頁数にして 14 頁の作品であるが、以上に紹介した作品冒頭部分の結婚記念日 3 周年の朝より始まる結婚式当日の叙述までは、分量にして 4 頁であり、全体の 28 パーセント強を占める。この分量の叙述において、作者は睡眠中の人物の容貌の外画描写と、覚醒時の意識内部の描写、さらに、新婦と風変わりな新郎との関係性の描写において、それぞれに、デッサンの正確さ、幻影の使用、双関語、および、現実想像をさりげなく継ぎ足す技法の適用などを行っている。

安徽省合肥の指折りの名家に生まれ、学校経営に没頭する父をもち、文化的に最良と思える環境で育った令嬢、張兆和に対する沈從文の結婚記念のプレゼントとして

---

<sup>8</sup> 『沈從文全集 8』 p.354-355



は、この短編小説は「辺城」や『湘行散記』に見える特徴的な技法を連続して使用しており、いかにもふさわしい。

## 5. 「主婦」の内容と表現——その4 経糸と緯糸

自身の表現技法に関して、晩年の沈從文は興味深い言説を残している。母方の甥である黄永玉の両親について、彼は40年代に散文「一個伝奇的本事」(1947)を発表したが、新たに『沈從文散文選』(1982)にそれを収録するに当たり、彼は「附記」を記し、この散文に関して次のように述べている。

この文章は当地の歴史的な変化を経糸とし、永玉の父母の一生、および、一家の災難の状況を緯糸とし、交互に織り上げて一編にしたものである。使用した色糸は4、5種類だけだが、繰り返し錯綜させ織り続けた結果、土家族の方格錦紋様の効果が出ている。布全体を見た場合、人間の目を惑わすところがあり、これの主題と寓意の所在をはっきり把握するのは難しいかもしれない。しかし、未だ「概念」や「公式」に制御されていない読者なら、視界が広がり、個人の故郷に対する「黍離の思い」を若干なりとも見出すこともあるだろう<sup>9</sup>。

黄永玉の両親がたどった運命は、故郷、鳳凰県の軍事的、行政的な没落衰退の運命を背景として下降の道を進んだものであり、「一個伝奇的本事」は内容的に決して軽い性格のものではない。とはいえ、母方の従兄夫婦を描くに際して沈從文が想起した創作方法は、数種類の色糸を、経糸緯糸に織り交ぜながら織り上げる作業に比せられるものであったという。「附記」の執筆終了は文末に1979年10月14日と記されている。この年は改革開放路線が打ち出された翌年である。1981年には沈從文の『古代服飾研究』が出版され、国内外で大きな話題となり、程なく、小説の選集とともに『沈從文散文選』も発表され、沈從文ブームが到来する。歴史的な変化を経糸とし、人物や家族のたどった境遇を緯糸とする比喩的思考のかたちは、「一個伝奇的本事」が書かれた40年代にも同様であったのか。やはり、50年代以降の膨大な分量の錦、緞子、刺繍などの実物を日々、手に取り、図柄紋様と複雑な織り方を研究する生活を経たうえで、往年の文章を振り返り、彼の脳裏に浮かんだ言葉ではないのか。簡単に結論は出しにくい、「附記」の述べるところが後付けの説明であるとしても、沈從文の文学作品を理解するうえでは参考になる。

「主婦」の場合、この「附記」に見られる思考を参考にするならば、この作品で経糸に相当するのはむしろ碧碧と彼であり、緯糸には二人のそれまでの生活体験や性

---

<sup>9</sup> 『沈從文全集 12』p.234

格など、それぞれの人格を浮かび上がらせる属性であるとの仮定が可能である。彼の風変わりで変な側面を結婚式当日の場で一挙に明示した古器物への嗜好は、緯糸とみなすことができる。

さて、ここで作品に書かれ陶磁器を整理すると、少なくとも、結婚式の日、彼が結婚祝として受け取ったのは、文意より類推して、(1) 陳家からの小皿 4 枚 (小碟子)、(2) 周家からの花瓶 (青花磁瓶)、(3) 王家からの唐三彩 (陶俑)、(4) 送り主の明記されない皿 (青花盤子) の 4 点となる。

50 年代以降の沈從文の著述に表れる古器物は陶磁器だけではない。絹織物、銅鏡、漆器、玉、螺鈿、ガラス、扇子等、広範囲にわたる。また、結婚後、現実の沈從文の収蔵物の範囲は一挙に増加する。例えば、張兆和の妹、張充和の収蔵品の明代大蔵經の表紙に使われた錦に沈從文は強い関心を抱き、自身の収蔵品とするが<sup>10</sup>、後にこの着眼は発展して『中国古代服飾研究』『明代織錦』の記述に結晶する。小説「主婦」の示す数字は、1933 年当時における彼の興味のありさまを伺ううえでの、一つの目安にはなる。

## 6. 「主婦」の内容と表現——その 5 「別有深意」

「主婦」の中間以降は結婚後の碧碧と彼の生活が主として描かれ、すでに述べたように、末尾の『全集』4 頁ほどは、結婚 3 年目の朝当日の現在に叙述がもどり、彼の思考と碧碧の思考がそれぞれ描かれ、互いにじゅうぶん理解し合えぬもどかしさが残るものの、愛してやまない二人の抱擁で作品の締めくくりとなる。

沈從文の内部で「物質文化」に対する興味がいかに発展していたか、それを探る視点よりして見逃してはならないのは、結婚当初、すでに何とも風変りな古器物愛好者になっていた彼にもともと、ひとつの考えがあったからである。

碧碧から上記引用のように、本当に愛しているのは陶磁器類ではないのかと言われた際、彼の反応について次のように書かれている。

彼はもうそれ以上しゃべらず、にこりと笑顔を浮かべた。あるいはそのとおりかもしれない。しかし彼女は自分の嗜好はもともと別に深い思慮があるからなのだということは知らない。彼は記憶の彼方に忘れ去られた何かを思い出そうとしているかのようで、しばらくすると、独り言のように言った。

「碧碧、君は今年 23 才で、もう花嫁になった。まさかこんな日が来るなんて 20 才の時に考えただろうか。甘い目元、愛くるしい顔、それが想像もつかぬほどかけ離れた男性を身近

<sup>10</sup> 張充和「三姐夫沈二哥」

に引き付け、いっしょに生活するようになろうとは。彼は飛んできたのも同じだ。なんと奇妙奇天烈なことだろう。ねえ、これは人間の選択でこうなったのか、それとも事の成り行きで偶然こうなったのか。運命で定められていたというなら、去年、ぼくが南方に行かねば、現在はあったらどうか。人為によるものだとしても、われわれは真の意味で完全に自分の行動を決められるだろうか。」

彼女はそっとため息をついた。すべて深く考えすぎてはいけない。先はあまりにも遠いのだもの<sup>11</sup>。

過去の記憶を探りつつ、独白めいた口調によって彼の語る偶然と必然に関する問いかけは、沈從文が「水雲」（1943）において展開した議論と本質的に共通するものであって、作中内の人物は自分たちの出会いと結合について、この種類の問いかけを繰り返している。

また、彼のとる姿勢はあたかも「辺城」における老船頭が孫娘の翠翠に対して過去の出来事を語りだそうとするときに似ている。つまり、年長で過去の比較的長い生活経験をもつ彼は、人間関係の喜怒哀楽に関してもさまざまな記憶があり、年下のなお生長の途上にある人間に対して複雑な思いをもたざるをえない。いっぽう、若い人間には目前に展開する事象はいちいちが目新しいものであり、自己の内部に起きる情感についてもそれがどのような状況であるのか把握しきれずに日々を過ごす。男女の年齢間の格差を外祖父の老船頭と両親ともにいない少女の取り合わせにおいて極限まで拡大したのが「辺城」の人物構成である。

この引用部分の前半に見える「深い思慮」の原文は「別有深意」だが、その深さは簡単には測り難い。ここで想像できるのは、人間の存在において常に人は偶然に出会う可能性があり、偶然の出会いにより内的に生じた情感が必然性を帯びた場合、理知で統御できる範囲を越えた行動を、その人物がとる可能性がある。この点について、呉立昌は新たな異性関係の可能性と考える。「水雲」の記述内容と深く結びつけて考える氏の分析は極めて精緻である<sup>12</sup>。

しかし、実際の沈從文は『從文自伝』に見られる従軍時代の体験からして、それまでの生活において、理性では制御しがたい行為の数々を見聞していた。20年代より30年代初頭にかけて彼の作品に見られる大胆奔放な、あるいは野性的な人物像の提示には、偶然と必然の分かれがたい世界において命を賭け生活の安定など度外視して行動する人間への共感や注視がある。そのような世界は、生活の平和と幸福には必ずしもそぐわない。

---

<sup>11</sup> 『沈從文全集 8』p.355

<sup>12</sup> 呉立昌『『人性的治療者』・沈從文伝』上海文芸出版社 1993、p.162-166 参考)

沈從文の想像力は瞬時に時空を超えて駆け巡るものであり、人間のあらゆる行為に好奇心の視線を投げかけるものであった。張兆和との結婚は、それまでの経歴からすれば、彼にまったく別の人生の局面を開くものであった。その際に「深い思慮」の結果として、古器物に対する嗜好が選択されていることは重要であろう。

作者は、彼が古器物に嗜好をもつようになった契機を次のように書いている。

特に彼女を簡単に傷つけることになったのは、人生を熱愛し、幻想にふけり、実際を無視する性格であって、その性格は彼個人の仕事のうえでは何ほどの成就をもたらしたものの、家庭生活の面では救いようのない弱点となった。彼はその欠点を事前に察知していたから、結婚に備え、相手の感情に適応するため、自己改造が必要と考えた。自己改造する具体的な方法は、個人の主要な仕事を棚上げにして、嗜好を変え、個人の幻想の発展を制止することだった。趣味にふけるあまり志を見失う玩物喪志の喩えは分かっていたものの、ちょっとした器物類を集めてやろうと思ひ立ち、この結果、家庭は幸福の度合いを増した。結婚後、彼は彼女のことが以前よりよく分かるようになり、彼女が「長所は留め、短所を捨てる」ことを彼に望んでいるのを知った。彼女の年齢では「人間の性格は、ある一面での長所は、別の一面では短所そのものとなる」ことがまだ理解できない<sup>13</sup>。

「主婦」において、筆者がもっとも気掛かりに思う点は、概ねこの1段落に収束する。育ちが違い、性格が異なり、年齢も離れている二人の男女は、結婚により子供をもうけることがあっても、互いによく理解し合うことは難しい。作者はこのことを念頭に置きながら、なおも互いの愛情を認め合って二人の関係性を作品化している。

彼の自己改造から出てくる言葉としては、翼を切り落とすという表現が上記引用以外に3カ所現れる。

- (1) 高く飛ぶ気持ちがない以上、翼はハサミで切り落とすべきだ。(構成場面7)
- (2) 3年が過ぎた。彼は瓶を割った夢を見て目が覚め、蒐集した小皿や小鉢を数えともう300個近い数になっていた。それらは彼の魂を押える砂袋であり、彼の幻想をはさみ切るハサミだった。(構成場面9)
- (3) 最後に物質への嗜好でもって自らの翼を切り落とす行為に考えが及び、3年来の少々とはいえ自分から人に合せる生活、また、古人が「跛者不忘履」と言った如く、情感のうえでは常に意外なものと戦わなければならないことなどを考えると、頭が次第に混乱してきた。(構成場面9)<sup>14</sup>

<sup>13</sup> 『沈從文全集 8』 p.359-360

<sup>14</sup> 『沈從文全集 8』 p.360、360、361

これらの例に見える翼に関する言葉は、いずれも幻想の翼を切り落とすという比喩を短縮したものであると考えられる。

引用（３）に続き、彼は部屋の外に出る。その直後の描写は、幻想の翼を切り落とすという思考と対比すれば、いかにも重要であろう。

見渡す限りの青空をじっと眺めると、情緒は限りない彼方へ遊泳を開始し、過去、未来、そしてあの虚空へと、どこであれ自由に進める気がした。彼自身は一つの抽象なのだ。やがて自分でもぼんやりしてきたなと思いきや、葡萄の植栽の井戸辺に自分が立っていたのが分かった。一枚の葉を摘み取り、身近にいる彼女を思うと、葡萄と同じで、なんと深く泥土に根付き、なんと生活が実際に即していることだろうかと思った。なぜか自分に対して憐憫の気持ちが湧いてきたが、それは憐憫と愛のないまぜになったものだった<sup>15</sup>。

この記述からすると、幻想の翼は彼にとってはいかに切り落とそうとしても無理なのである。すなわち、300 個近い古器物の収蔵をもってしても、想像の翼が羽ばたくときにはその飛翔をとめようがない。これを言いかえれば、情緒の遊泳、あるいは抽象への飛翔といえよう。彼は、そのような方向性を内に秘めながら、もう一方では大地に根差し実際に即した生命の貴重さも体感的に理解している。抽象への飛翔と大地への密着と、この両者の方向性は両立しがたい矛盾というべきもののなか。それとも或いはこの作中人物が有している才能の幅の広さというべきもののなか。作品に結論が書かれているわけではない。

再度、沈從文と物質文化の関係の発展という視点にもどれば、小説に反映された結婚後、3 年目の収蔵品が 300 個近いという数字は、記憶にとどめてよいであろう。現実の沈從文の生活に当てはめれば、1936 年当時の数字となる。この翌年 1937 年には、日中戦争勃発にともない、彼は雲南へ向けて疎開の旅に出る。旅の過程で古器物に対する知見が飛躍的に増加する。そして、辺縁地帯における文化的古器物の残存分布状況について、新たな幻想を抱き仮説立てることになる。

## 7. 終りに

「主婦」のモデルである張兆和について筆者は、これまで重ねて述べたことがあるので小論では多くは繰り返さない。彼女は『湖畔』という短編小説集を出版し、『人民文学』編集者ともなった。沈從文の没後、大量の遺稿を整理して全集出版の陣頭指揮をとるといって、途方もない仕事を行った。この女性に関しては、むしろ専著が出版

---

<sup>15</sup> 『沈從文全集 8』 p.361

されてよいはずである<sup>16</sup>。

小論では、短編小説「主婦」はあくまでも作品化されたテキストと考え、碧碧すなわち張兆和、あるいは、彼、すなわち沈從文という把握の仕方に若干の距離を置き、登場人物については、常に碧碧と彼の名前で取り上げた。この方が、「主婦」を即物的に自伝資料と読むことから生じる不都合を回避できると考えたからである。

「主婦」の基本的性格は、作者沈從文による、自身と妻の姿を作中人物に投影した自己分析の試みであり、人間の根源的な相互理解に関する問いかけの実験と考えられる。生活習慣も個性も異なる二人の人物の関係性は、容易なことでは、相互理解の実現はできそうもない。このことを作者はあらゆる角度から入念に検討し、作品化し、妻と共有することによって、また読者と共有することによって、問題の改善を図ろうとしているかに見える。つまり、作品内部に提示された問題は、作品冒頭の明朗さに比して深刻である。

この深刻さに関連して作中人物の古器物への嗜好が彼という人物により選択されている。これは現実の沈從文に置き換えた場合、やはり示唆的であろう。ともかく、作品に描かれた時点において、すでに彼は並々ならぬ嗜好癖に陥っている。碧碧は彼と結婚した当日、すでに古器物への興味に深く染まった彼を見出すのである。このことは重要であって、これが正確に事実を反映しているとすれば、張兆和が沈從文と結婚した日には、彼はすでに陶磁器類に対する観察眼、詳しい知識、強烈な嗜好を有していたことになる。

もっとも、いま一つここでつけ加えておかねばならないのは、碧碧と彼との間の不調和をはらんだ関係性は、作品において一種の多声構造を生み出す効果も生み出しているのではないかということである。彼女が周囲の友人や親類から、結婚し、出産するにもかかわらず、そのたびごとに時間の経過と逆行するかのように若くなってゆくという記述にしても、深刻さを取り繕う阿諛とも受け取れない。沈從文の 1930 年代半ば以降の作風の深化は 1934 年の郷里への帰省と結び付けて考えることが可能だが、郷里への旅で得た先鋭な現実感覚とは別に、身近な人物との関係性の問題に深く思慮しようとしたこととも関係があるのではないか。そのような疑問が思い浮かぶ。

張兆和が結婚当時に受けた驚きとその後続く夫を理解するための努力は、『従文家書』(1996)「後記」にも窺える。夫の没後、『沈從文全集』32 巻の編集を行った際、困難を極めた「物質文化史」部分の作業を完遂するうえでも、それは根源的な力となったであろう。

短編小説としては「主婦」は上述の範囲で取り上げただけでも、沈從文の一生を考

<sup>16</sup> 福家道信翻訳『湘行書簡』訳注、『火鍋子』42 号、1999。福家道信「張兆和さんを偲ぶ」、『湘西 沈從文研究』5 号、2002

えるうえで、見逃しがたい要素を濃密に内包する作品であり、十分に味読に値する価値ある作品である。ここには周到な配慮で客観化された人物像のなかに、それを書いた沈從文の 1933 年から 1936 年当時の「物質文化史」への志向の一端が明瞭に見いだせる。これより前の時期に置いて、またこの後に続く時期において、彼の志向はどのような現れ方をしているのか。次稿以降の課題としたい。

#### 参考文献

- 呉世勇『沈從文年譜（1902-1988）』天津人民出版社, 2006.  
呉立昌『『人性的治療者』・沈從文伝』上海文芸出版社, 1993.  
沈從文『沈從文全集 1-32』北岳文芸出版社, 2004.  
沈從文、張兆和『從文家書』上海遠東出版社, 1996.  
張充和「三姐夫沈二哥」『海内外』28 号, 1981.  
福家道信翻訳『湘行書簡』訳注、『火鍋子』42 号, 1999.  
福家道信「張兆和さんを偲ぶ」、『湘西 沈從文研究』5 号, 2002.  
福家道信「音を手がかりとして——『雪晴』の場合——」『近畿大学語学教育部紀要』4-2, 2004.